

## 京都芸術劇場友の会 会員募集中

2001年に開設された京都芸術劇場（春秋座・studio21）は、大学内に立てられた劇場にふさわしく、古典から実験的な公演まで、幅広いジャンルの催しが行なわれております。《京都芸術劇場友の会》では、劇場の活動をより知っていただくため、会員の皆様に公演の詳しい情報をいち早くお知らせし、また、チケット割引や先行販売を通じて、少しでも快く劇場をご利用いただけるようサービスを行っております。ご用意できる特典はささやかですが、多くの皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

### ■会員特典 | 年会費：2000円・入会日より1年間有効

- 1 情報誌「京都芸術劇場ニュースレター」（年3回）や公演チラシを定期的にお届けします。
- 2 京都芸術劇場チケットセンター（窓口・電話・オンラインストア）で会員番号によるチケット予約、1公演お一人様2～4枚（公演により異なる）まで割引料金にて購入可能です。  
（公演により、予約・割引のない場合、窓口・電話のみの対応の場合もございます）
- 3 当学主催公演など、会員限定の先行販売・先行抽選販売。
- 4 春秋座、studio21で行われる公開講座、公開シンポジウムなどご案内します。
- 5 10年以上ご継続の会員様はプレミアム会員として、さらにお得な特典が受けられます。

■ご入会方法 | 劇場チケットセンター窓口、もしくは、郵便振替にてお申込みいただけます。

■お問い合わせ | 京都芸術劇場チケットセンター TEL:075-791-8240（平日10:00～17:00）

## 舞台芸術 24号 好評発売中

2002年に刊行された舞台芸術研究センター機関誌『舞台芸術』は、京都芸術劇場で行われる舞台芸術研究センター主催の実験公演や研究活動を報告する場であり、そのプロセスを公開する場でもあります。各号ごとに特集を設け、古今東西のパフォーミング・アーツを今日的な視点で切り取り、21世紀における舞台芸術の新たな可能性について考察します。最新号である24号の特集は「言葉と音楽 ―〈日本語〉を超えて」です。ぜひこの機会にお買い求め下さい。

お問い合わせ

京都芸術大学 舞台芸術研究センター

tel.075-791-9437

fax.075-791-9438

E-mail k-pac@kua.kyoto-art.ac.jp

村川拓也『事件』  
アンケートにご協力ください  
今後の企画の参考とさせていただきます  
5月14日～5月21日17:00まで



## 事件

演出：村川拓也

2021年5月14日（金）～5月16日（日）

主催：学校法人瓜生山学園 京都芸術大学 舞台芸術研究センター  
開学30周年・劇場20周年記念公演

# 事件

スーパーで起きた刺傷事件に居合わせた当事者の私は、作品の稽古を経て、気づくと、スーパーの店員や犯人に思いを馳せ、目を向け、考えるようになりました。でも今回の出演者は事件の当事者ではなく、刺された人ではないし、刺した人でもないの、私は台詞を書きはじめました。出演者の話から台詞にしたものもありますが、書く事が不可能な台詞もありました。勝手に外からやってきた台詞もあれば、やってこない台詞もありました。結果、このように物語を描き、このように物語を語る事になりました。

村川拓也

## キャスト・スタッフ

演出	村川拓也
出演	有間七海 北川航平 島田幹大 陌間彩花 早川聡 山田幸音
舞台監督	浜村修司
音響	佐藤武紀
照明	葭田野浩介 (RYU)
映像	城間典子
制作	豊山佳美

## 京都芸術大学 舞台芸術研究センター

制作	長澤慶太 河本彩
技術監督	大田和司
劇場管理	山中仁 (舞台)   才木三里 (音響)   小山陽美 (照明)

## 不確かな変化の中で 村川拓也 2005-2020 配布中

本作の演出家である村川拓也がこれまで発表した作品を、本誌「不確かな変化の中で村川拓也 2005-2020」にて紹介しています。ぜひご覧ください。

編著 | 林立騎 テキスト | 長澤慶太・高嶋慈・林立騎 発行 | 村川拓也

この作品の演出家である村川拓也は、本学の映像舞台芸術学科を卒業後、演出家／映像作家としての活動を続けてきました。2005年の本学卒業後、劇団「地点」の演出助手を4年間務め、2009年より京都を拠点に自身の創作活動を開始。そして2011年のフェスティバル／トーキョーで発表した『ツァイトゲーバー』という作品をきっかけに、彼の作品は国内外の演劇祭や劇場からの強い支持を集め、その後は多くの演劇作品を、日本、シンガポール、韓国、ドイツなどで発表してきました。

戯曲に書かれた物語を俳優が演じるのではなく、ある現実の出来事を当事者が演じるという形式の彼の作品は、やがて「ドキュメンタリー演劇」と呼ばれ、その当時から多くの人の高い評価と強い驚きを集めました。そして、つねに何かの現実を元に創作され、その現実の当事者たちが舞台に登場する彼の作品は、時に、「ありのままの現実を再現している」などと解説されてきました。

しかし今回、村川自身が経験した現実が、ありのままに舞台で再現されることはありません。というか、それはもう二度と現実として起きてはならない出来事であるはずです。また、あるいは、だからこそ村川は、現実そして当事者という、彼が今まで築き上げてきた自身の作品風土を放棄してまで、ありのままの現実ではない出来事としての「事件」を、虚構と共に描くに至ったのかもしれない。

彼は多くの演劇作品といくつかの映像作品において、つねにドキュメンタリー作家のような視点から、作品を発表してきました。しかし「事件」との遭遇をきっかけに、これまでの10年で築き上げた、戯曲を書かない演出家としての安定した評価や立場を捨て、彼がこれまでの10年間で決して足を踏み入れなかった分野へと足を踏み入れることになりました。

長澤慶太 (京都芸術大学 舞台芸術研究センター)

主催 | 学校法人瓜生山学園 京都芸術大学 舞台芸術研究センター

助成 | 文化庁文化芸術振興費補助金 (劇場・音楽堂等機能強化推進事業)

独立行政法人日本芸術文化振興会